



創立153周年

9月号（令和8年8月27日発行）

kurosho-dayori

鉄小だより



鉄小学校ホームページはこちら→

自然を感じ自然と共に

校長 玉置 恭美

横浜の夏は祖父母、親世代がこどもだったころとは、別物になっている、という記事を目にしました。気象庁の観測地点「横浜」で1966～1975年の10年間で猛暑日（最高気温が35度以上）を記録した日は、合計0日。しかし2016～2025年の10年間では合計67日になったというものです。そして2025年の最高気温は38度。前出の比較の中で、もう一つ着目すべきは、日最低気温が25度以上の日数が8日から40日に増加していることです。エアコンを適正に使用して、とテレビでも呼びかけていますが、夜になっても気温が下がらず、体を冷やすことができる時間帯そのものが減ってきた、ということになります。前夜に体温と睡眠が回復しきらないまま、次の日中を迎える、蓄積型熱中症にも注意が必要です。人間の体は気温が上昇すると、体を冷やすために汗をかき、そよぐ風などによって汗が蒸発する際に体温を下げます。その体の機能を十分に果たせるよう、水分摂取、塩分補給、日差しを防ぐ、風を感じられる状況を作る、など一人ひとりが自然と共に生きることにも目を向ける必要があります。

この夏、大きな地震や豪雨によって被害を受けられた地域の皆様に心からお見舞い申し上げます。豪雨の後で、「鉄町を心配しました」というお話を頂きました。「どうしてですか？」と尋ねると、その方は昔の鶴見川の氾濫を覚えていて、「長時間の豪雨によって、鶴見川と道路の境目がわからなくなり、鉄町の田畑が水没してしまった、今は大丈夫なのか」と。平成6年の夏ごろまで、鶴見川流域では床下浸水の被害が出ていたようです。護岸工事や川の形状を変える工事、流域を守る取組が進み、現在に至ります。港北区の鶴見川流域の古いお宅では、家の軒下に各戸で小舟を吊るしていたとお聞きし、驚きました。自然と共に生きつつ、災害時に命を守るために何をし、どのような準備が必要か、など、9月1日の総合防災訓練の際に改めて考える機会をもちたいと思います。



8月の鉄小稲